

平安京左京二条四坊十一町
烏丸丸太町遺跡

2017年

古代文化調査会

例 言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市中京区俵屋町において、阪急不動産株式会社によるマンション建設に伴い実施した平安京左京二条四坊十一町跡・烏丸丸太町遺跡（京都市番号16H320）の発掘調査（記号16TAWA）報告書である。
2. 発掘調査は、阪急不動産株式会社より委託を受けた古代文化調査会の水谷明子が担当し、家崎孝治が補佐した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集・執筆は水谷がおこなった。
5. 図面及び遺物整理、製図トレースは水谷が、遺物実測は板谷桃代が担当した。
6. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系VIによる。
7. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2,500分の1の地図（御所）、国土地理院発行の25,000分の1の地図（京都北部）を調整し、使用した。
8. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2004年版）に準じた。
9. 遺構・遺物番号は実測図・写真ともに共通している。
10. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

赤松佳奈 家原圭太 伊東義道 上野道子 馬瀬智光 江沼 晃 奥井智子 梶川敏夫
片山雅之 熊井亮介 熊谷舞子 黒須亜希子 鈴木久史 西森正晃 新田和央 扶間 崇
長谷川行孝 平尾政幸 堀 大輔 宮原健吾
(株)明輝建設 (株)アクセス都市設計 (株)真興 (公財)京都市埋蔵文化財研究所
阪急不動産(株)

本文目次

平安京左京二条四坊十一町・烏丸丸太町遺跡

| | | |
|-----|-------|----|
| I | 調査の経過 | 1 |
| II | 遺構 | 4 |
| III | 遺物 | 12 |
| IV | まとめ | 22 |

図版目次

| | | | |
|------|----|---|-------------------|
| 図版 1 | 遺跡 | 1 | 調査地近景（北から） |
| | | 2 | 第1面全景（北から） |
| 図版 2 | 遺跡 | 1 | 第2面全景（北から） |
| | | 2 | 第3面全景（北から） |
| 図版 3 | 遺跡 | 1 | 第4面全景（北から） |
| | | 2 | 井戸3（西から） |
| | | 3 | 井戸5（北から） |
| | | 4 | 土壇28（北東から） |
| | | 5 | 土壇32（北から） |
| 図版 4 | 遺跡 | 1 | 土壇76（北から） |
| | | 2 | 土壇76 断割（西から） |
| | | 3 | 土壇76 杭跡検出状況（北から） |
| | | 4 | 土壇76 断割（北から） |
| | | 5 | 土壇76 完掘状況（北から） |
| 図版 5 | 遺跡 | 1 | 井戸42（東から） |
| | | 2 | 井戸42 井戸枠検出状況（西から） |
| | | 3 | 井戸42 断割（西から） |
| | | 4 | 調査区北東部柱穴群（北西から） |
| | | 5 | 土壇120（西から） |

| | | |
|------|----|----------------------------|
| 図版 6 | 遺跡 | 1 井戸216 (東から) |
| | | 2 井戸216 円形井戸枠内検出状況 (西から) |
| | | 3 井戸216 円形井戸枠内下層検出状況 (西から) |
| | | 4 井戸216 断割 (西から) |
| | | 5 土壌170 (北から) |
| 図版 7 | 遺物 | 土壌170・井戸216・土壌120・井戸42出土遺物 |
| 図版 8 | 遺物 | 井戸42・土壌80・76出土遺物 |
| 図版 9 | 遺物 | 土壌76出土遺物 |
| 図版10 | 遺物 | 土壌76・28・32・石組56出土遺物 |
| 図版11 | 遺物 | 井戸3・42・土壌32・76・井戸216出土遺物 |

挿 図 目 次

| | | |
|-----|-----------------|----|
| 図 1 | 調査地点位置図 | 1 |
| 図 2 | 調査地位置図 | 2 |
| 図 3 | 平安京条坊と調査地位置図 | 2 |
| 図 4 | 四行八門と調査位置関係図 | 2 |
| 図 5 | 北壁断面実測図 | 5 |
| 図 6 | 東壁断面実測図 | 5 |
| 図 7 | 第1・2面遺構実測図 | 6 |
| 図 8 | 第3・4面・4面下層遺構実測図 | 7 |
| 図 9 | 井戸216実測図 | 8 |
| 図10 | 土壌155断面実測図 | 8 |
| 図11 | 井戸42実測図 | 9 |
| 図12 | 土壌80断面実測図 | 10 |
| 図13 | 土壌76実測図 | 11 |
| 図14 | 土壌32実測図 | 11 |
| 図15 | 井戸3実測図 | 11 |
| 図16 | 土壌170出土土器実測図 | 13 |
| 図17 | 井戸216出土土器実測図 | 13 |
| 図18 | 土壌55出土土器実測図 | 13 |
| 図19 | 土壌120出土土器実測図 | 13 |
| 図20 | 井戸42出土土器実測図 1 | 15 |
| 図21 | 井戸42出土土器実測図 2 | 17 |

| | | |
|-----|----------------|----|
| 図22 | 土壙80出土土器実測図 | 17 |
| 図23 | 土壙76出土土器実測図 1 | 18 |
| 図24 | 土壙76出土土器実測図 2 | 18 |
| 図25 | 土壙28出土土器実測図 | 19 |
| 図26 | 土壙32出土土器実測図 | 19 |
| 図27 | 石組56出土土器実測図 | 19 |
| 図28 | 軒瓦拓影・実測図 | 21 |
| 図29 | 石製品実測図 | 21 |
| 図30 | 銭貨拓影図 | 21 |
| 図31 | 鍛冶師（喜多院職人盡絵屏風） | 22 |

平安京左京二条四坊十一町・烏丸丸太町遺跡

I 調査の経過

調査に至る経緯

調査地は京都市中京区俵屋町302番地である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地・平安京左京二条四坊十一町跡及び烏丸丸太町遺跡にあたる。2016年、当地に阪急不動産株式会社によるマンション建設の計画がなされ、工事に先立ち京都市文化財保護課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下1.05mにおいて室町時代の遺構が良好な状態で遺存していることが判明し、発掘調査の必要性が考慮されるに至った。京都市の指導の下、当調査会と施主との協議の結果、当調査会が発掘調査をおこなうこととなった。調査は2016年11月より開始することとなった。

調査経過

調査地の平安京左京二条四坊十一町は、西が万里小路、東が富小路、北が大炊御門大路、南が冷泉小路に囲まれたところで、調査地は十一町の南部中央にあたる西二行の北八門に相当する^{町1}。また、烏丸丸太町遺跡は弥生時代から古墳時代の集落跡である。

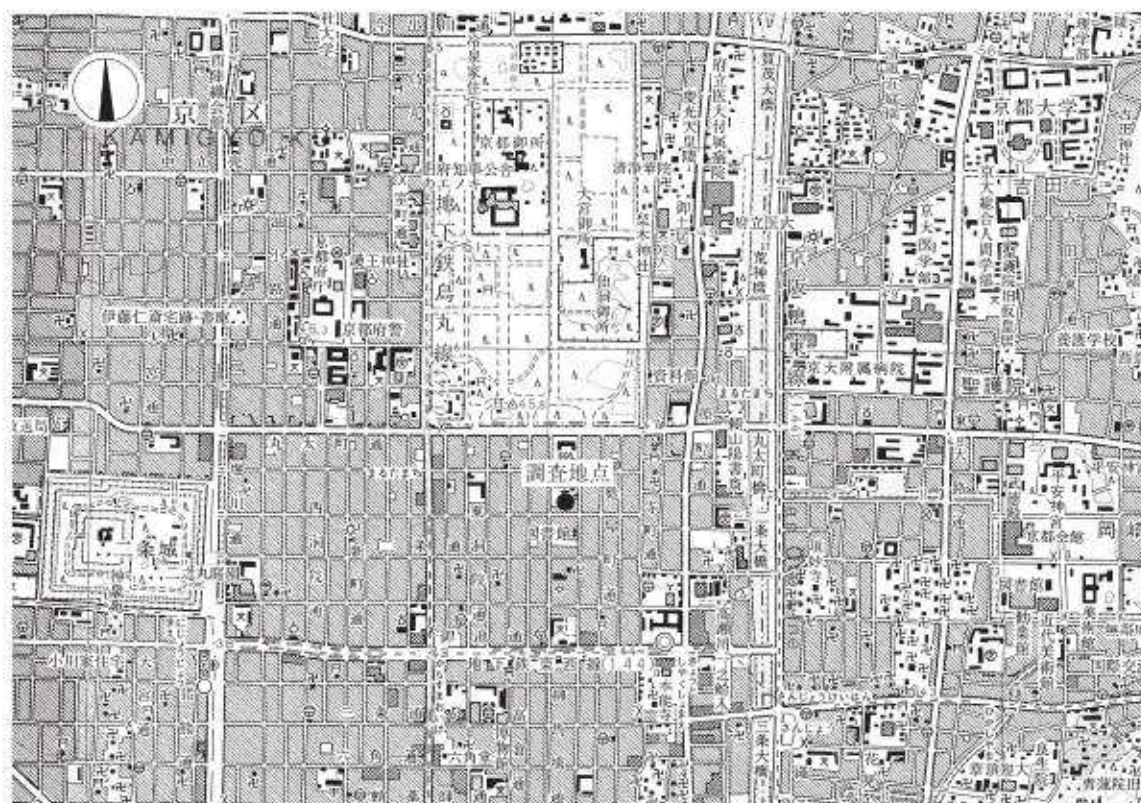


図1 調査地点位置図 (1/25,000)

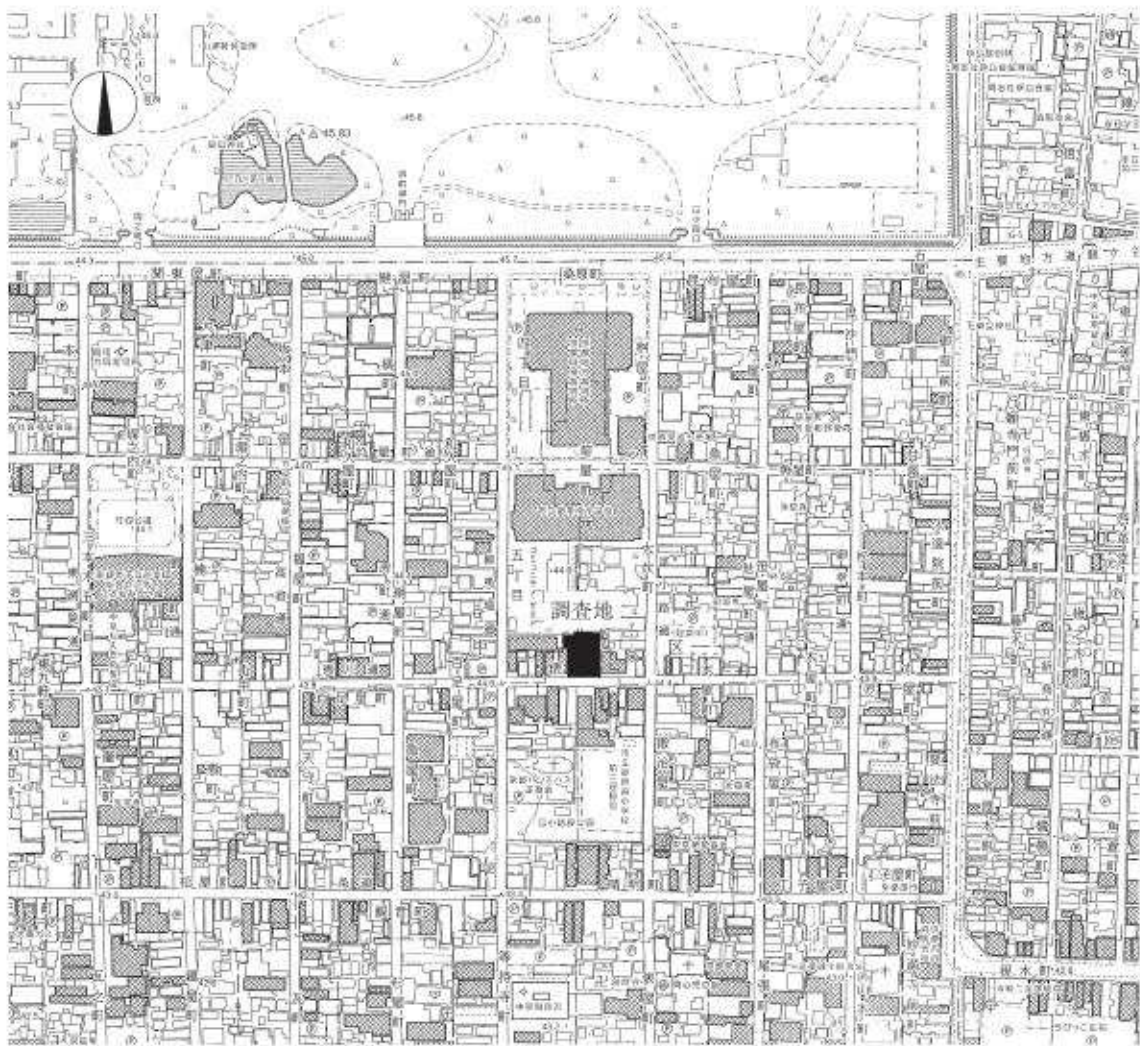


図2 調査地位置図 (1/5,000)

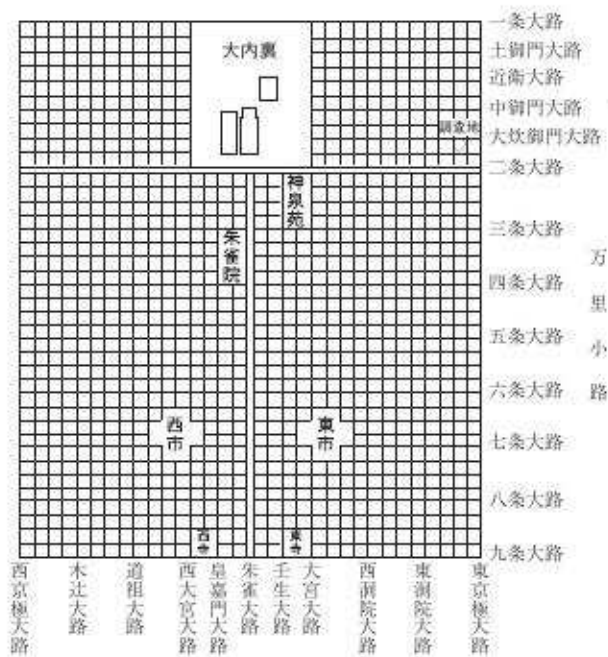


図3 平安京条坊と調査地位置図

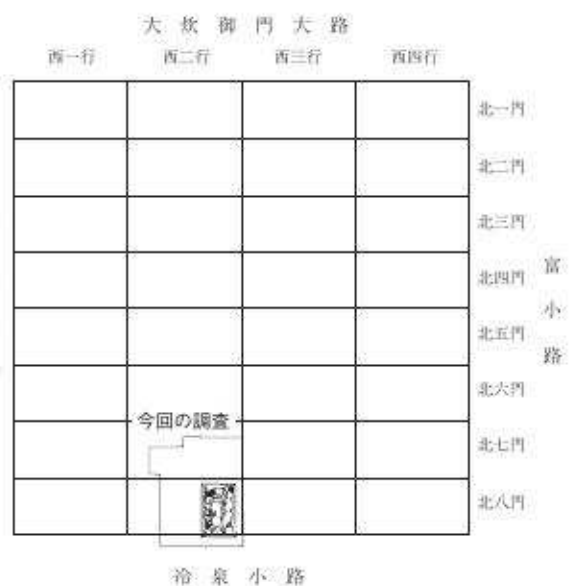


図4 四行八門と調査位置関係図 (1/2,000)

本調査地の近隣調査としては、1993年に同じ十一町内で京都市立御所南小学校校舎新築工事に伴い発掘調査が実施されている。平安時代初頭から江戸時代後期に至る掘立柱、井戸、欄列、溝跡、土壌などが多数検出されており、江戸時代の遺構からは鋳造関連の遺物が多数出土したと報告されている。

今回の調査においては、十一町の宅地利用の変遷と、白河法皇が仮の御所とした平安時代の大炊御門第、弥生時代から古墳時代の集落跡である烏丸丸太町遺跡の広がりを念頭に置き、試掘調査の結果を踏まえ、盛土を機械力によって除去した後、調査に着手した。

調査は2016年11月1日から開始し、12月14日に終了した。調査面積は拡張区を含め126㎡で、実働日数は32日間であった。

調査の方法としては、(公財)京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系Ⅵによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点(X=-109,237.7m、Y=-21,482.8m)とする、東西方向にアラビア数字を、南北方向にアルファベットを記号として付し、4mメッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。十一町における築地四隅の座標値(新測地系)は次のとおりである。

| | | | |
|----|--------------------------------------|----|--------------------------------------|
| 北西 | X = -109,131.89m Y = - 21,541.68m | 北東 | X = -109,131.40m Y = - 21,422.29m |
| 南西 | X = -109,251.28m Y = - 21,541.19m | 南東 | X = -109,250.79m Y = - 21,421.81m |

Ⅱ 遺 構

調査区の盛土及び攪乱は概ね1～1.2m程であるが、調査区中央部で南壁から北に長さ10m、幅3m、深さ2.5mの攪乱を検出した。基本層序としては地表下約1.1mで安土桃山時代から近現代の遺構を確認し、以後鎌倉時代から室町時代の中世の遺構面、平安時代後期から鎌倉時代の遺構面を経て、地表から深さ約1.5mで平安時代前期から中期の遺構面を検出した。

遺構の総数は216基であった。遺構の種類としては、井戸、掘立柱、土壇跡などがある。以下、主要な遺構について述べる。

平安時代前期～中期

土壇170（図8・図版3の1・6の5）

調査区中央部の東壁沿いに位置する。東半は調査区外となる。南北長1.9m、東西長0.9m以上、深さ0.4mを測る。埋土には炭化物と焼土を含む。10世紀代の遺物が出土している。

井戸216（図8・9・図版6の1～6の4）

調査区北東部に位置する。東端は調査区外となり、西端は削平されている。方形の井戸枠の下に円形縦板組の井戸枠を据えたもので、最下部では曲物の痕跡を確認した。掘形は南北3.7m、東西2.5m以上、深さ2.4mを測る。井戸枠は残存していないが、一辺1.1mの方形の井戸枠の痕跡と、その下に内径0.6mの円形縦板組の井戸枠を据えた痕跡を検出した。深さ1.1mで方形の井戸枠を固定したと考えられる厚さ0.1mの暗灰黄色粘質土層があり、叩き締められたようにしっかりとした面がつくられていた。その粘質土面の下に高さ0.7m、幅8cmの円形に組まれた井戸枠の縦板の痕跡が一部確認できた。最下部の曲物の内径は0.55m、高さ0.45mを測るが、これも痕跡のみである。曲物内下層から埋納したと考えられる土師器の小壺（土器18）と、灰釉陶器の杯（土器21）が出土した。円形井戸枠内からは意図的に入れられたとみられる拳大から長辺0.4m程の石が数個入れられており、その上層から土師器の皿（土器16）が出土した。類似した事例として2015年の平安京右京二条三条十五町の調査の井戸142²³³においても、同様に井戸内に石を入れ、その上面に土師器皿を正位の状態²³⁴で2枚重ねて埋納する。また、2016年の平安京右京六条三坊二町の調査の井戸290²³⁴においても曲物内下層から墨書した黒色土器碗と銭貨が出土し、その上層からは数個体の石と土師器の杯が埋納した状態で出土している。今回の井戸216もその出土状況から井戸の廃絶時に何らかの祭祀を行ったと推察することができる。

土壇155（図8・10・図版3の1）

調査区南西部の西壁沿いに位置する。西半は調査区外となる。南北長1.4m、東西長1.1m以上、深さ0.15mを測る。埋土は炭化物を含む。

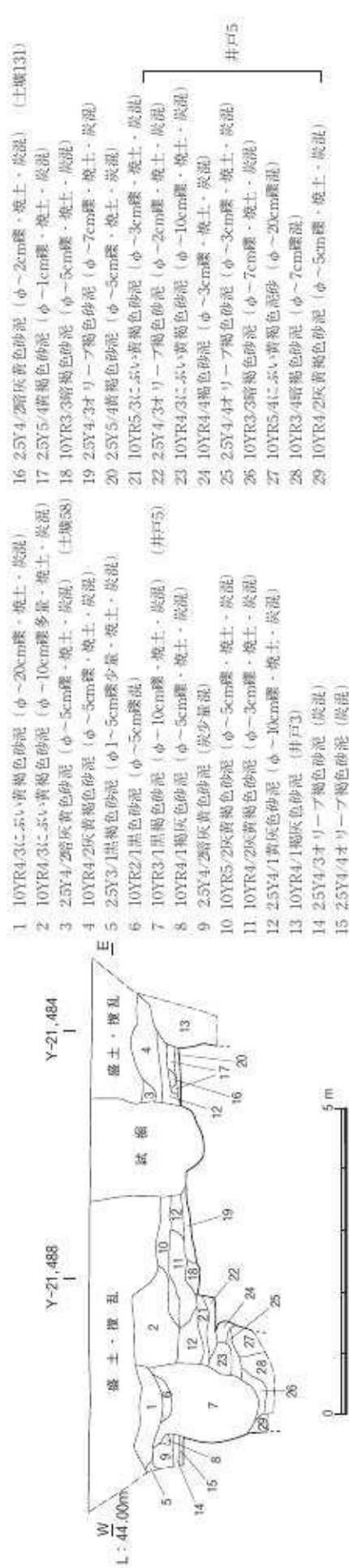


図5 北壁断面実測図 (1/100)

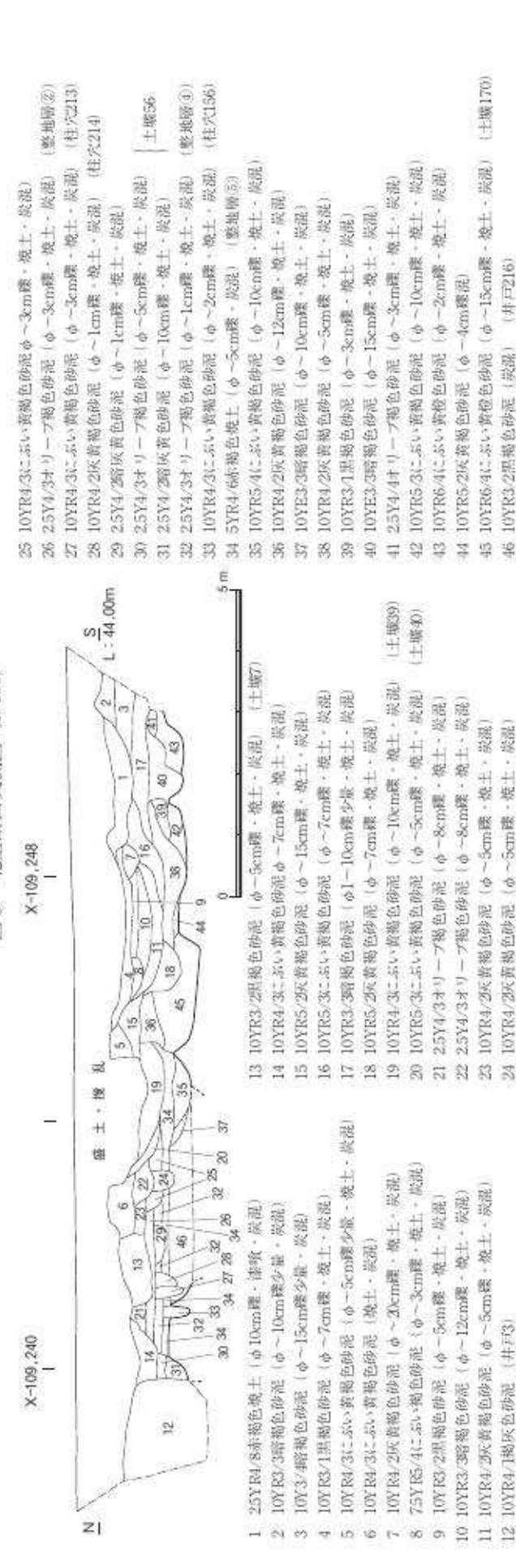
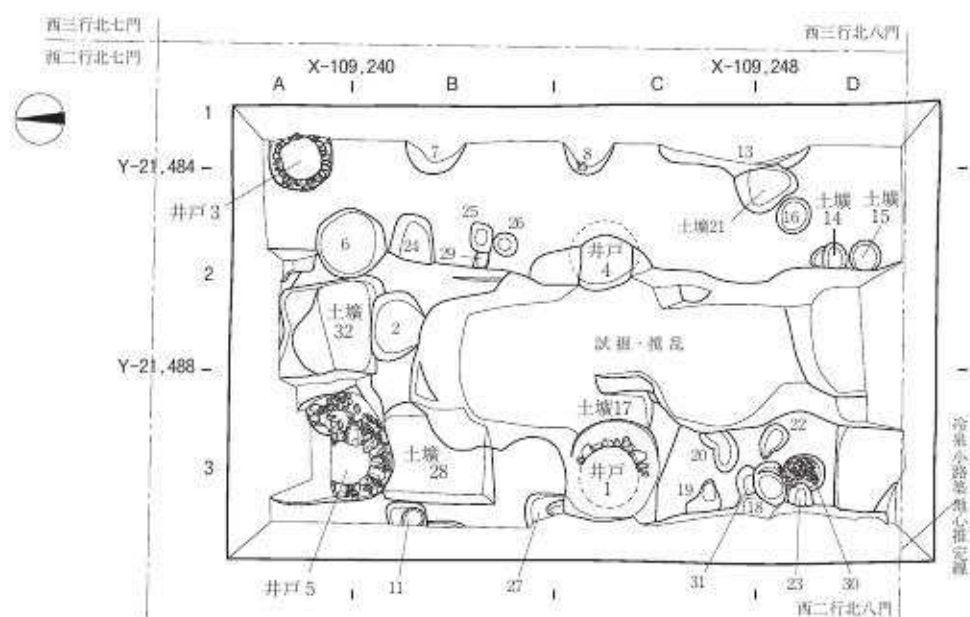


図6 東壁断面実測図 (1/100)

第1面



第2面

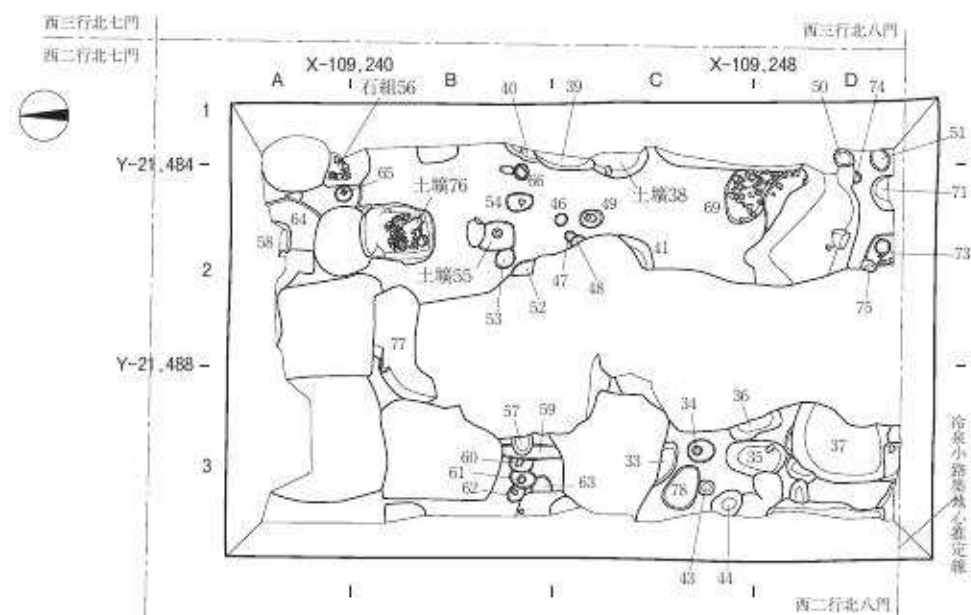
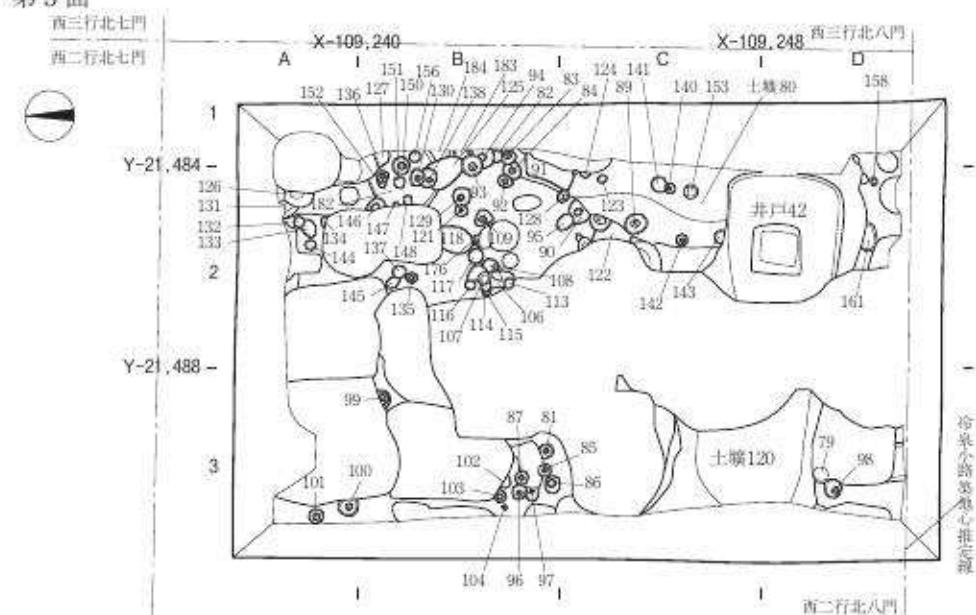
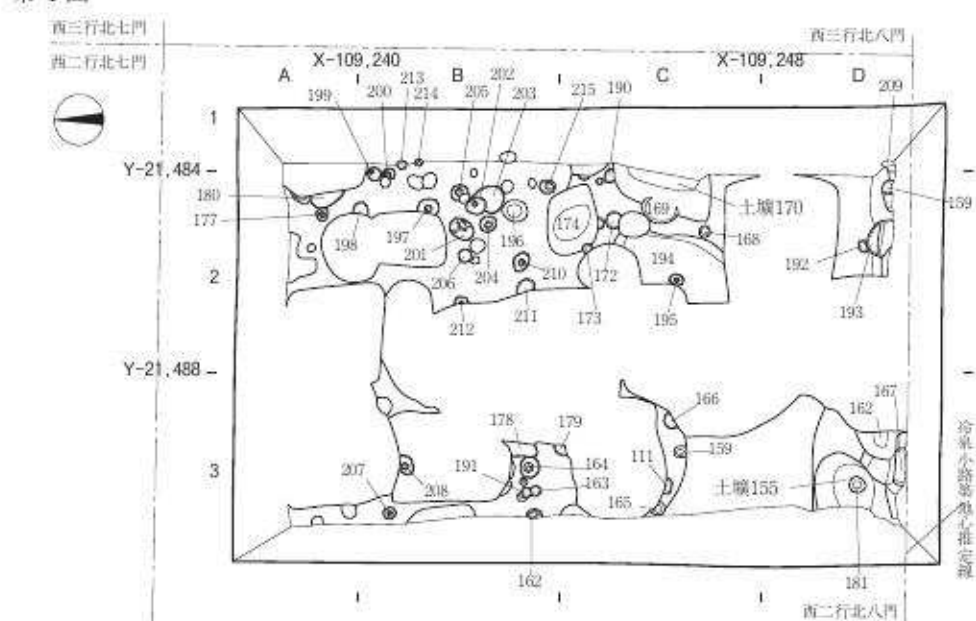


図7 第1・2面遺構実測図 (1/150)

第3面



第4面



第4面下層 井戸216

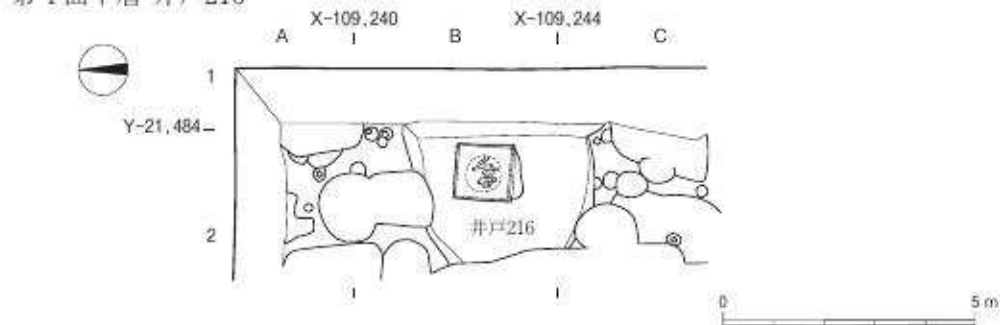


図8 第3・4面・4面下層遺構実測図 (1/150)

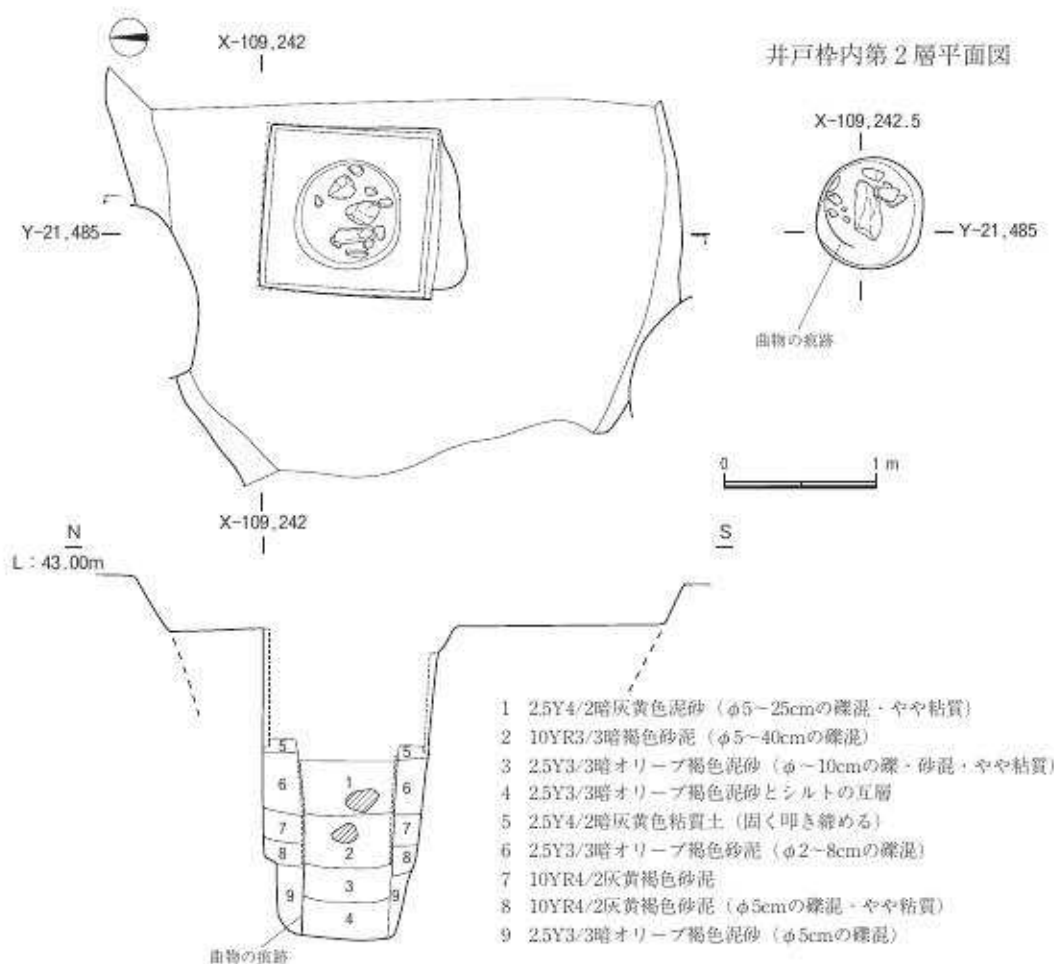


図9 井戸216実測図 (1/50)

平安時代後期～鎌倉時代

土坑55 (図7・図版2の1)

調査区北東部に位置する。南北長0.75m、東西長0.6m、深さ0.2mを測り、掘形は隅丸方形を呈する。下層から皇朝十二文銭の一つである「延喜通寶」(初鑄907年)が出土している。出土土器は11世紀に属する。

調査区北部柱穴群 (図8・図版2の2・5の4)

調査区北半部に位置する。径0.2~0.4m、深さ0.15~0.4mを測り、掘形は円形を呈する柱穴群である。切り合って重複している柱穴も多く、礎石を据えたものもある。平安時代後期に

X-109,250ライン断面



図10 土坑155断面実測図 (1/40)

属する。

土壙120 (図8・図版2の2・5の5)

調査区南西部の西壁沿いに位置する。西端は調査区外となり、東端は削平されている。南北長3.4m、東西長2.3m以上、深さ0.5mを測る。埋土は大きくは3層に分けられ、上層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂泥層、下層は炭化物と5~15cmの礫を含む黒褐色(10YR3/2)砂泥層、最下層は南部のみでオリーブ褐色(2.5Y4/4)砂泥層である。平安時代後期の遺物が出土している。

井戸42 (図8・11・図版2の2・5の1~5の3)

調査区南東部に位置する。西端は削平されている。方形縦板組の井戸で、下層に曲物を据える。掘形は隅丸方形を呈し、南北長2.3m、東西長2.5m程で、深さ3.1mを測る。井戸枠は一辺1mを測り、縦板と横棧、隅木の痕跡が確認できた。縦板の一部を井戸内に倒れこんだ状態で検出した。曲物の内径は0.9mを測る。平安時代末期につくられ、鎌倉時代に廃絶されたと考える。

土壙80 (図8・12・図版2の2)

調査区中央部の東壁沿いに位置する。東部は調査区外、南部は井戸42にきられる。南北長4.1

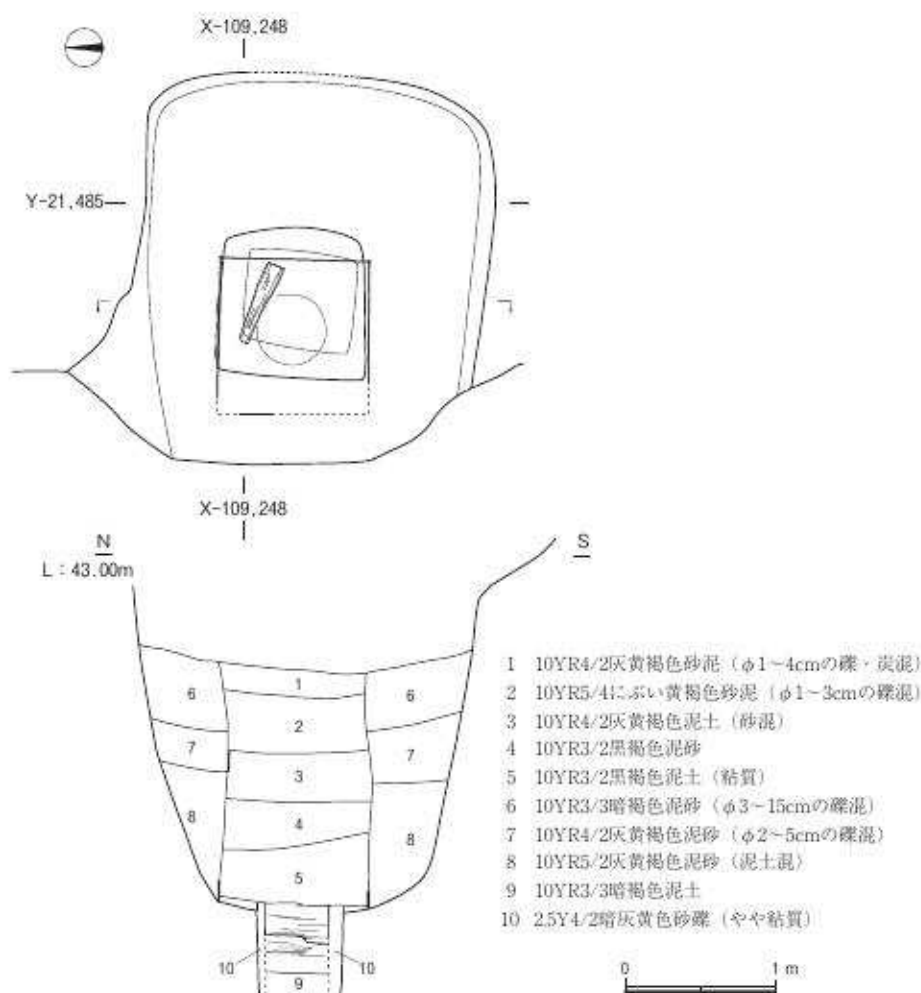


図11 井戸42実測図 (1/50)

X-109,246ライン断面

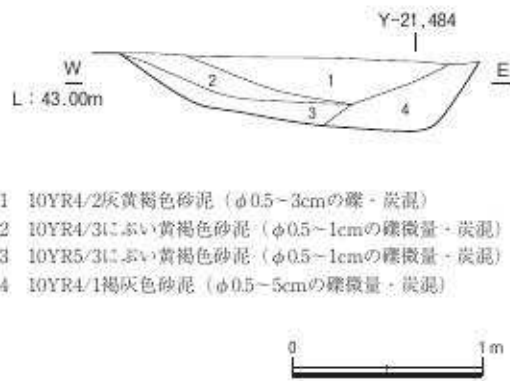


図12 土坑80断面実測図 (1/40)

m以上、東西長1.6m以上、深さ0.45mを測る。

埋土は赤っぽく炭化物を含む。

土坑21 (図7・図版1の2)

調査区南東部に位置する。南北長1.2m、東西長0.9m、深さ0.15mを測る。埋土は炭化物を含み、出土遺物は鎌倉時代後半に属する。

室町時代

土坑14 (図7・図版1の2)

調査区南東部に位置する。西端は削平されている。南北長0.5m、東西長0.55m以上、深さ

0.2mを測る。掘形は楕円形を呈し、埋土は灰黄褐色 (10YR4/2) 砂泥で、室町時代前期の遺物が出土している。

土坑15 (図7・図版1の2)

調査区南東部に位置する。掘形は円形を呈し、径0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は灰黄褐色 (10YR4/2) 砂泥である。

安土桃山時代～江戸時代以降

土坑76 (図7・13・図版2の1・4の1～5)

調査区北東部に位置する。南北長1.5m、東西長1.2m、深さ0.7mを測り、掘形は長方形を呈する。内部は杭で側板を支える箱状になっており、東面のみ板の一部が確認できた。内部からは土師器の羽釜を多数とする遺物が出土した。羽釜は内外面ともに煤けており、内面に付着物の残るものや朱がついた個体があった。これらの出土遺物は鍛冶の際に使用した器具の一種と考えられ、廃業時に埋納したと推察する。

土坑28 (図7・図版1の2・3の4)

調査区北西部に位置する。南北長2.2m、東西長1.5m、深さ0.8mを測り、掘形は長方形を呈する。埋土は上層は15cm程の礫と暗褐色 (10YR3/3) 粘質土を含み、下層は炭を含む黒褐色 (10YR3/2) 砂泥で、竈の羽口や鉄滓が出土した。鍛冶関連の遺構と考えるが、壁面には焼けた痕跡などは確認できなかった。

土坑32 (図7・14・図版2の1・3の5)

調査区中央部北壁沿いに位置する。南北長2.2m、東西長1.9m、深さ0.7mを測り、掘形は長方形を呈する。埋土には焼土や炭を多く含む。下層から鉄滓がかたまて出土した。土坑28と同様に鍛冶関連の遺構と考える。

土坑38 (図7・図版2の1)

調査区中央部東壁沿いに位置する。東端は調査区外となる。南北長1.1m、東西長0.6m以上、

遺物出土状況図

下層杭検出状況図

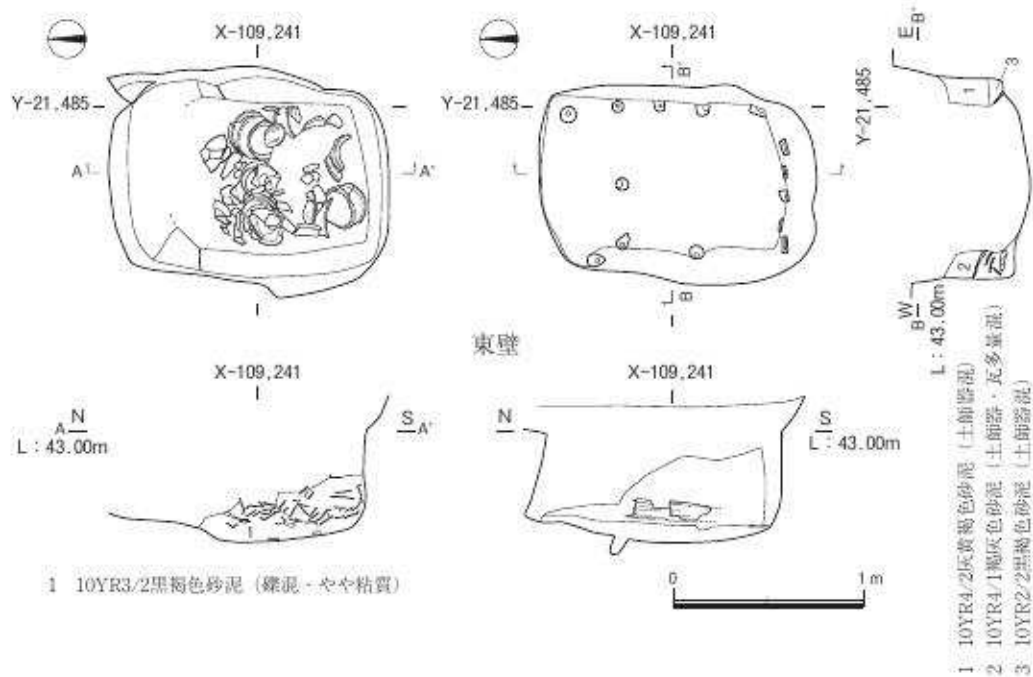


図13 土城76実測図 (1/40)

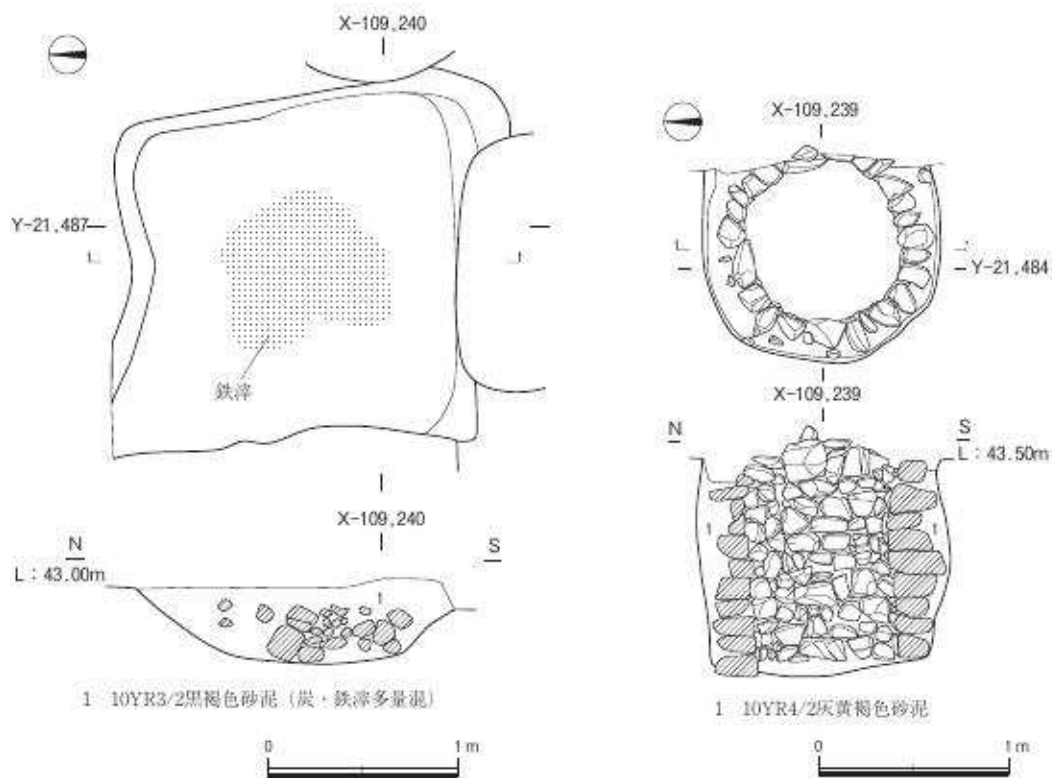


図14 土城32実測図 (1/40)

図15 井戸3実測図 (1/40)

深さ0.2mを測る。

井戸5（図7・図版1の2・3の3）

調査区北西部の北壁沿いに位置する。石組井戸である。掘形北端は調査区外となる。南北長2.7m、東西長2.5m、深さ1.7m以上を測り、掘形はやや方形を呈する。内径0.8m程の円形の石組をもち、つくり替えが確認できた。隣接する土壙28、32と同時期の遺構で、鍛冶関連に使用された井戸と考える。

井戸3（図7・15・図版1の2・3の2）

調査区北東角部に位置する。石組井戸である。掘形東端は調査区外となる。掘形は径1.3m程の円形を呈し、深さ1.2m以上である。井筒は0.15～0.3mの川原石と花崗岩を円形に積み、内径は0.8mを測る。染付や描鉢、焼けた棧瓦が出土している。

石組56（図7・図版2の2）

調査区北東部東壁沿いに位置する。東端は調査区外となり、北部は井戸3に削平される。南北長0.8m以上、東西長0.7m以上、深さ0.4mを測り、掘形は方形を呈する。0.1～0.15mの小ぶりの石を2段積んだ石組である。江戸中期。

Ⅲ 遺 物

出土した遺物は整理箱に69箱ある。時代は平安時代から江戸時代のものがある。遺物の種類には土師器、黒色土器、須恵器、施釉陶器、瓦類、石製品、銭貨などがある。以下主要な遺物について述べる。

なお、時代区分は平安京の土器編年をもとにおこなう。

土器・陶器類

土壙170出土土器（図16・図版7）

土師器（1～6）、緑釉陶器（7～9）がある。

土師器には皿A（1）、杯A（2～4）、杯L（5、6）がある。1は口径13.8cm、器高2cmを測る。2～4は口径16cm、5、6は口径20cmを測り、いずれも口縁端部は小さい肥厚部をもつ。5は体部内外面に黒斑がみられる。緑釉陶器（7～9）は底部のみである。7は底径6.4cmを測り、削り出しの輪高台である。内外面に磨きを施し施釉する。硬質。8は底径7cmを測る。底部外面に糸切り痕が残る貼り付けの輪高台である。内外面に磨きを施し、濃緑色の釉で施釉する。軟質。9は底径8cmを測る。貼り付けの輪高台で、内外面に丁寧に磨きを施し施釉する。硬質。10世紀代。

井戸216出土土器（図17・図版7）

土師器（10～18）、緑釉陶器（19、20）、灰釉陶器（21）がある。

土師器には皿A（10～16）、杯A（17）、小壺（18）がある。皿Aは口径10～11cm、器高0.9～

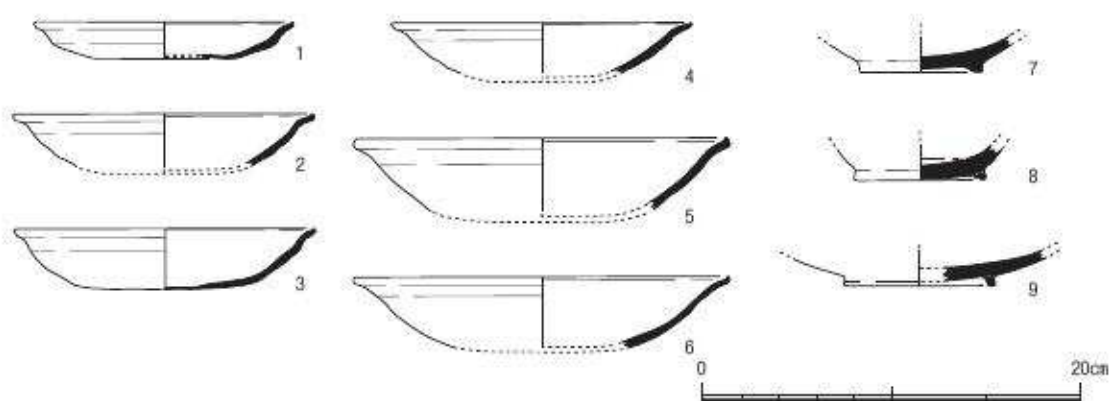


図16 土壙170出土土器実測図 (1/4)

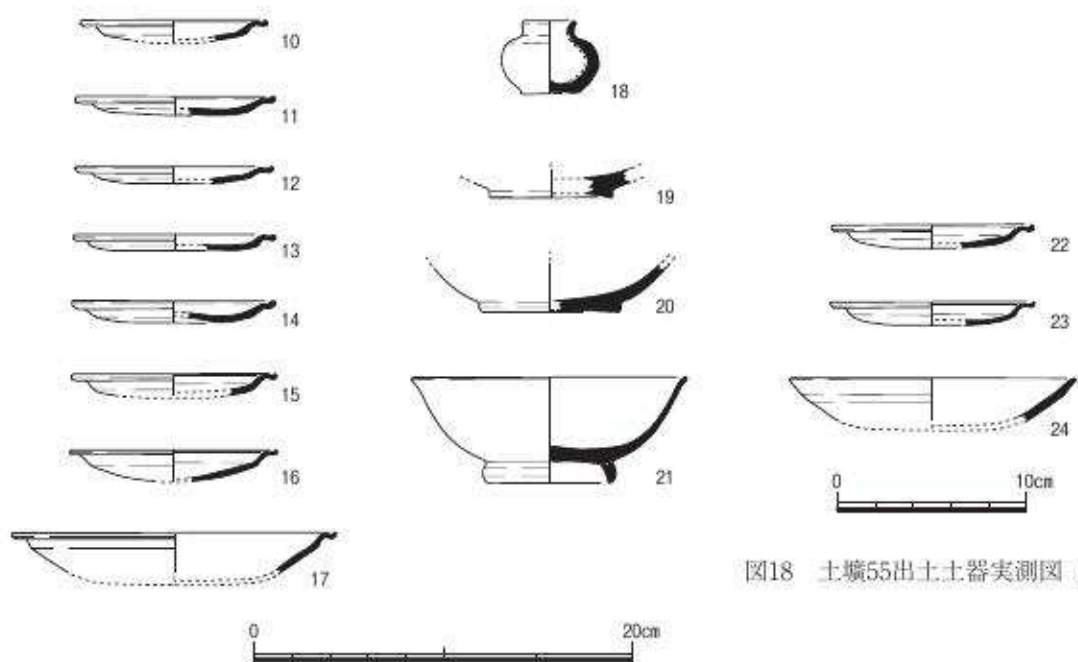


図17 井戸216出土土器実測図 (1/4)

図18 土壙55出土土器実測図 (1/4)

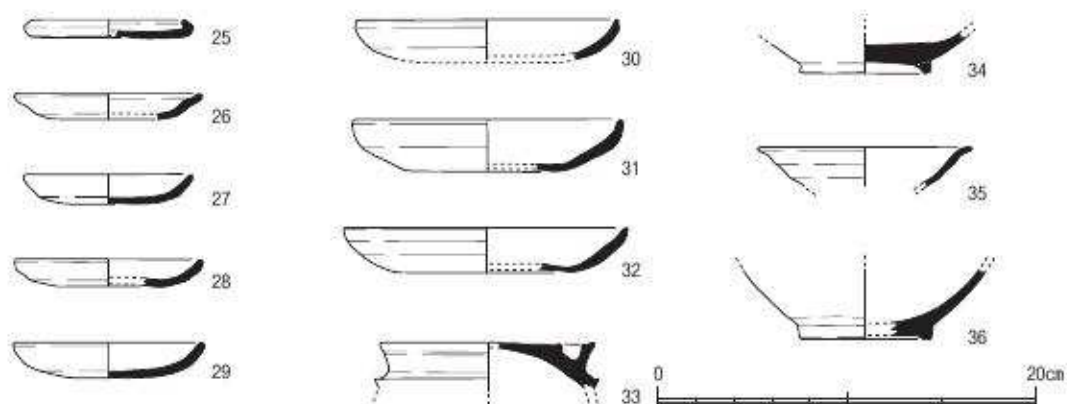


図19 土壙120出土土器実測図 (1/4)

1.7cmを測る。14は口縁端部内外面に煤が付着する。17は口径17.2cmを測り、口縁部は一段の強いナデにより外反し、口縁端部は小さい肥厚部をもつ。18は口径2.9cm、器高3.9cmを測る。底部外面は未調整、体部外面から内面は丁寧な横ナデを施す。緑釉陶器は底部のみである。19は底径6.6cmを測る。平坦な削り出し高台である。内外面に磨きを施し施釉する。軟質。20は底径7.6cmを測る。平坦な削り出し高台である。内外面に磨きを施し施釉する。硬質。灰釉陶器(21)は碗で、口径14.6cm、器高5.7cm、底径7.1cmを測る。底部外面に糸切り痕が残る、貼り付けの輪高台は断面がやや三日月状を呈する。10～15、17、19、20は方形井戸枠内出土、16は円形縦板組井戸枠内出土、18、21は曲物内出土。

土壙55出土土器 (図18)

土師器皿A(22、23)、杯N(24)がある。22、23は口径10.8cm、器高1.3cmを測り、口縁部は一段の強いナデにより外反し、口縁端部は小さい肥厚部をもつ。22の内面は一部煤ける。24は口径15.2cmを測る。

土壙120出土土器 (図19・図版7)

土師器(25～32)、須恵器(33)、灰釉陶器(34)、白磁(35、36)がある。

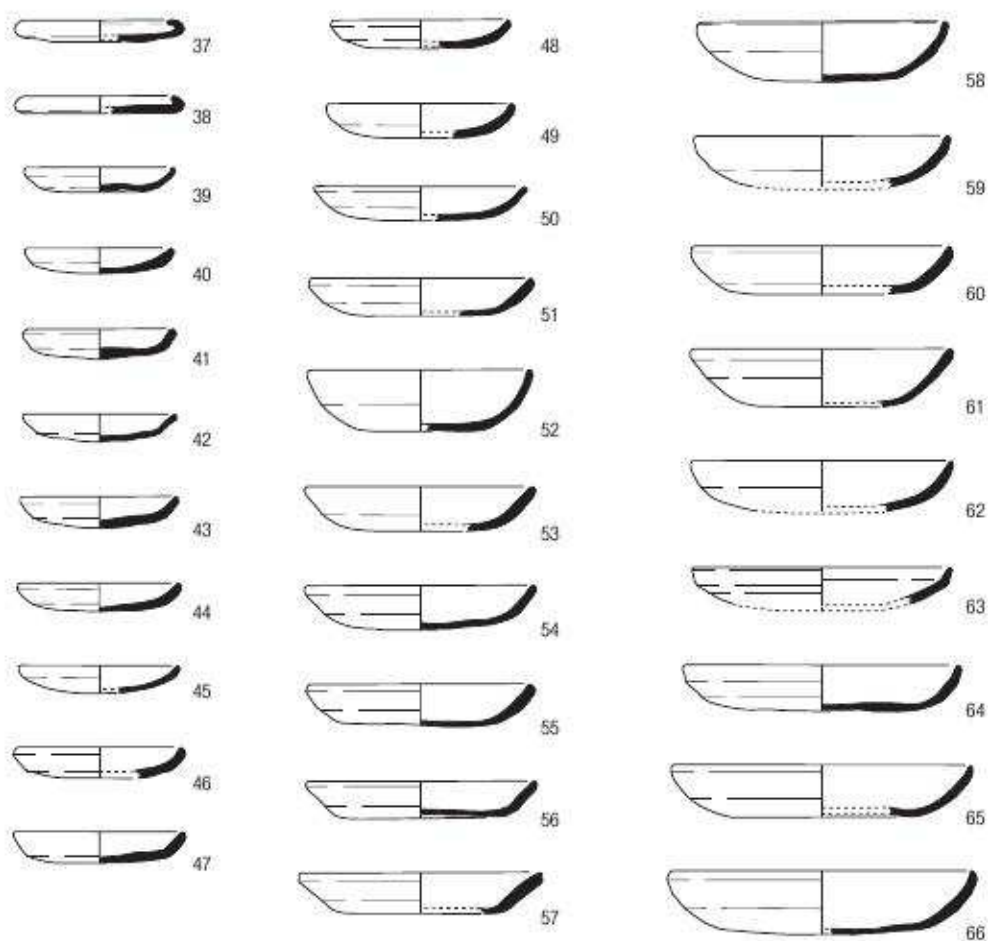
土師器には皿Ac(25)、皿A(26)、皿N(27～32)がある。25は口径8cm、器高1cmを測る。26は口径10cm、器高1.4cmを測る。皿Nは口径9～16cmを測る。31、32は内外面ともに煤ける。須恵器(33)は円面硯である。口径11.4cmを測る。陸部は使用痕で平滑、墨が僅かに確認できる。裏面は自然釉がかかる。脚部の透かしは確認できなかった。灰釉陶器(34)は底部のみである。底径6.9cmを測る。底部外面に糸切り痕が残る貼り付けの輪高台である。白磁には杯(35)、碗(36)がある。35は口径11.4cmを測る。口縁部は外反する。胎土、釉ともに灰白色を呈する。36は底部のみである。底径7cmを測る。削り出しの輪高台である。V期。

井戸42出土土器 (図20・21・図版7・8)

土師器(37～81)、黒色土器(82)、須恵器(83～87)、灰釉陶器(88～90)、白磁(91～94)がある。

土師器には皿Ac(37、38)、皿N(39～81)がある。皿Acは口径8cm、器高1～1.2cmを測る。皿Nは口径8.2～16.4cm、器高1.3～3.4cmを測る。56の口縁端部内外面に煤が付着する。37～66は掘形出土、67～81は井戸枠内出土である。82は黒色土器碗のAタイプである。口径16.8cm、器高5.4cmを測る。内面から体部外面にかけて微かに磨き痕が確認できる。黒化は口縁部内外面で、全体的に付着物が多い。須恵器には杯(83、84)、鉢(85)、甕(86、87)がある。83は口径8.2cm、器高2.3cmを測る。内外面は丁寧なナデを施し、底部外面に糸切り痕が残る。84は口径9.4cm、器高2.1cmを測る。口縁端部は煤が付着する。底部外面は糸切り痕が残る。85は片口鉢である。口径34.2cm、器高12.9cmを測る。体部外面から口縁部内面はナデを施し、体部から底部の内面は極めて平滑な使用痕が確認できる。底部外面には糸切り痕が残る。86は口径18.2cmを測る。体部外面はタタキを施し、口縁部から内面はナデで仕上げる。内外面ともに煤けている。87は口径28.6cmを測る。体部外面はタタキを施し、口縁部内外面はナデで仕上げる。

掘形出土



井戸枠内出土

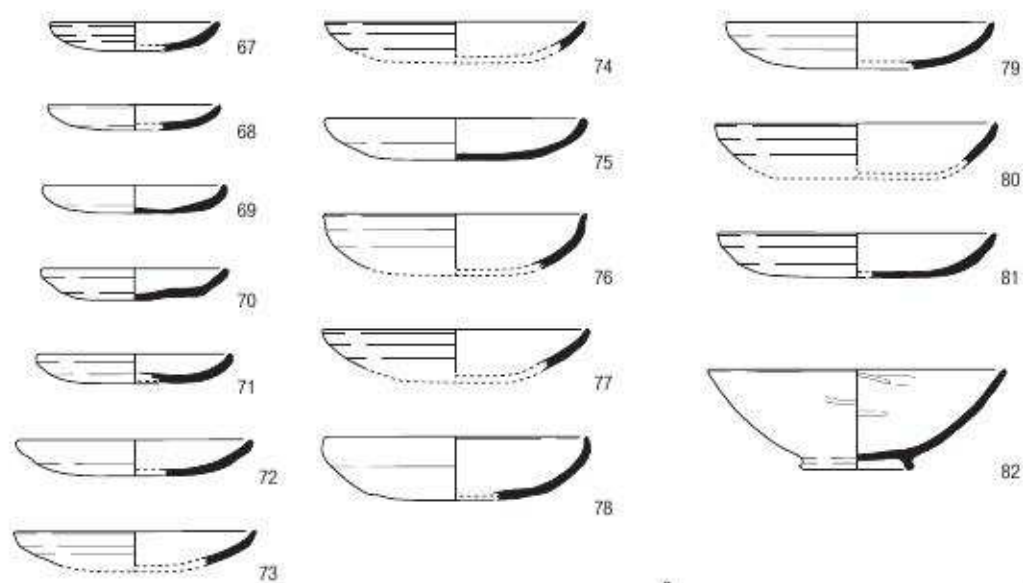


图20 井戸42出土土器实测图1 (1/4)

体部内面に当て具の痕跡が残る。灰釉陶器には碗(88~90)がある。88は口径9.4cm、器高2.5cmを測る。口縁部外面から内面を施釉する。胎土はやや粗い。89は底径7cmを測る。貼り付けの輪高台で、内外面ともに煤ける。90は口径15.2cm、器高4.2cmを測る。底部外面は削りを施し、高台を貼り付ける。口縁端部は外反する。井戸杵内出土である。白磁には碗(91~94)がある。91、92は口径14cmと16.2cmを測る。何れも口縁端部に小さな玉縁をもつ。93は底径5.5cmを測る。削り出しの輪高台である。底部内面に貫入が確認できる。94は底径6.4cmを測る。削り出しの輪高台で、内側に段をもつ。

土境80出土土器(図22・図版8)

土師器(95~112)、灰釉陶器(113)がある。

土師器には皿A(95)、皿Ac(96~99)、皿N(100~112)がある。95は口径9.6cm、器高1.3cmを測る。皿Acは口径9.4~11cm、器高1~1.2cmを測る。皿Nは口径9.2~15.8cm、器高1.5~2.9cmを測る。103は内面に黒斑が確認できる。灰釉陶器(113)は底部のみである。底径10cmを測る。V~VI期。

土境76出土土器(図23・24・図版8~10)

土師器(114~117、122~135)、焼締陶器(118)、施釉陶器(119~121)がある。

土師器には皿S(114、115)、塩壺(116、117)、羽釜(122~135)がある。114は口径10.4cmを測る。115は口径12.4cm、器高2.4cmを測る。116は口径5.6cm、器高8.9cmを測る。117は口径5.8cm、器高8.9cmを測る。羽釜は口径20.2~23cmを測る。口縁部は横ナデ、体部内外面はハケナデを施す。122、129、131、135は内面に当て具の痕跡が残る。いずれも口縁部は外反し、口縁端部は摘み上げる。球型に近い体部をもち、短い齔が体部のやや下半よりにつく。内面もしくは内外面が煤けており、122、125~127、129、131、135は内面に付着物が残り、128は内面に朱が確認できた。すべて大和I型羽釜に分類される。焼締陶器(118)は丹波系播鉢で、口径37.6cm、器高15.2cmを測る。内面には一単位4本の播目を密に施す。施釉陶器には美濃瀬戸系の皿(119、120)、壺(121)がある。119は口径14cm、器高3.5cmを測る。120は口径15cm、器高4.2cmを測る。底部内面に重ね焼き痕が確認できる。121は四耳壺である。17世紀前半。

土境28出土土器(図25・図版10)

土師器(136~141)、施釉陶器(142~147)、焼締陶器(148)がある。

土師器には皿S(136~140)、焙烙鍋(141)がある。皿Sは口径10~12cm、器高1.9~2.3cmを測る。136~138は口縁端部内外面に煤が付着する。141は口径34cmを測る。外面は真っ黒に煤け、内面はまだらに煤ける。施釉陶器には碗(142、146)、皿(143~145、147)がある。142は唐津系の碗で口径8.4cm、器高3.9cmを測る。底部内面に重ね焼き痕が残る。143は唐津皿で、口径11.2cm、器高3.2cmを測る。144は美濃瀬戸系の皿で口径12cm、器高3.1cmを測る。145は唐津皿で口径12.2cm、器高3.2cmを測る。146は美濃瀬戸系の天目茶碗である。口径12.2cm、器高6.6cmを測る。147は美濃瀬戸系の皿である。口径14.2cm、器高4cmを測る。焼締陶器(148)は播鉢で、口径26cmを測る。内面の播目は一単位6本である。XI期古。

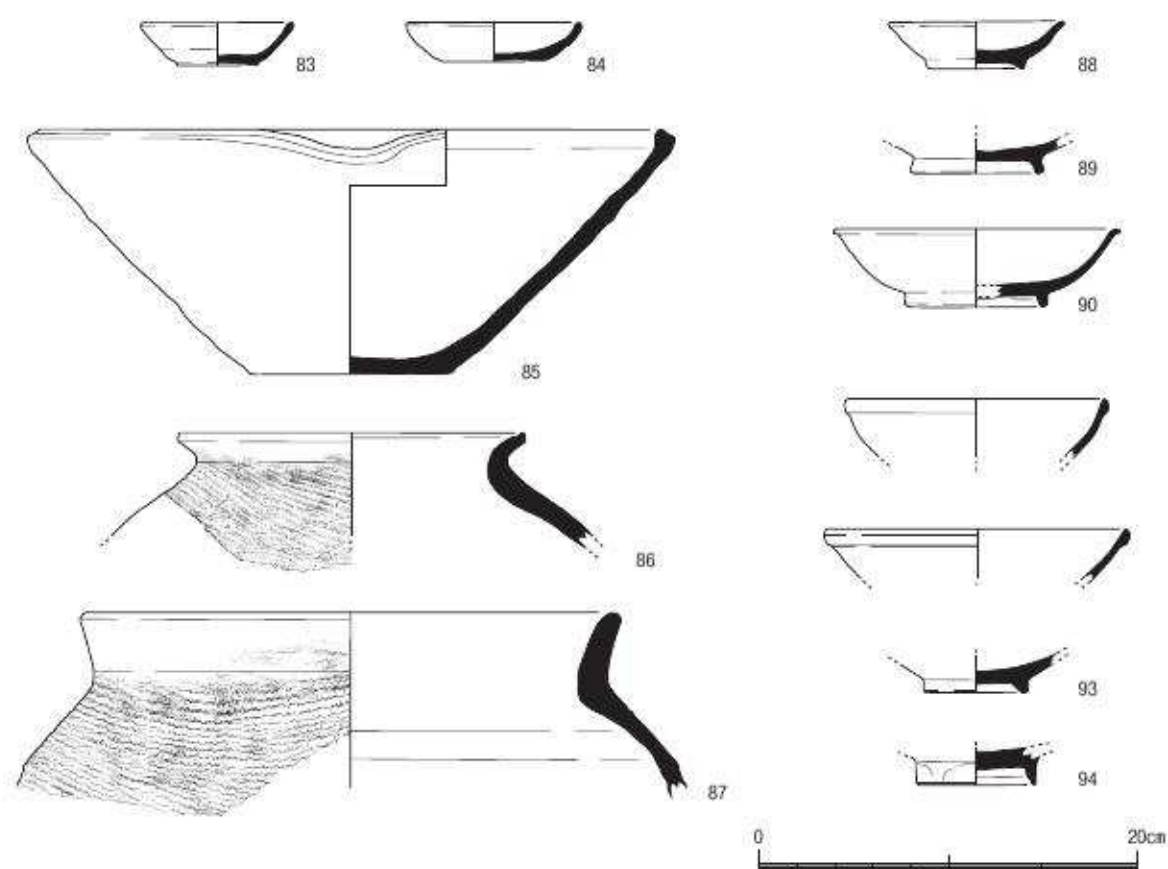


图21 井戸42出土土器実測図 2 (1/4)

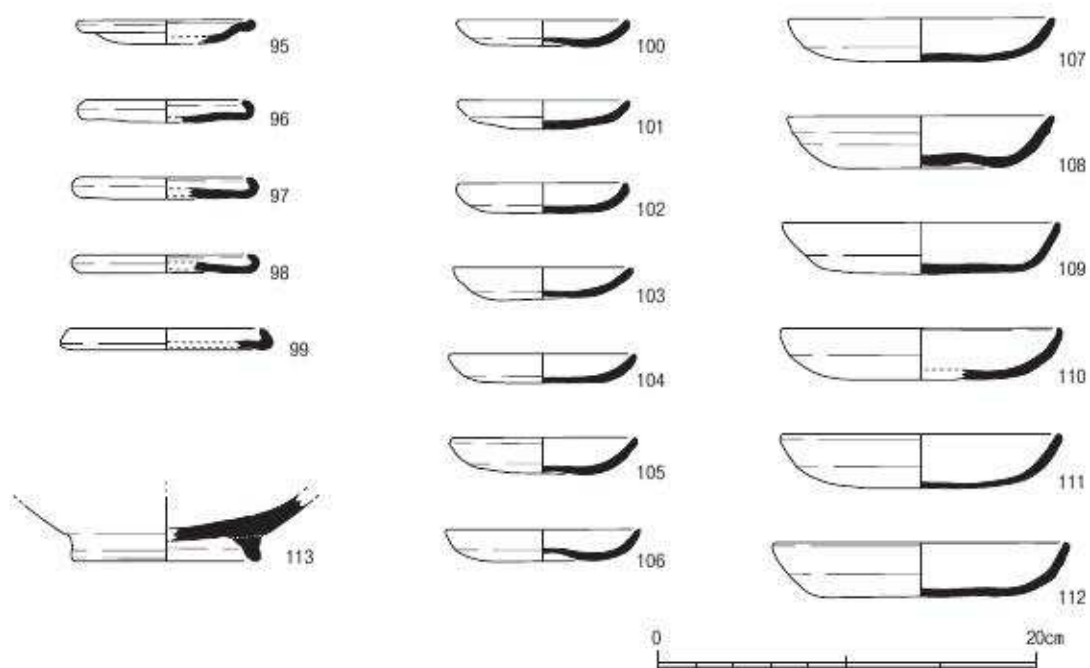


图22 土壙80出土土器実測図 (1/4)

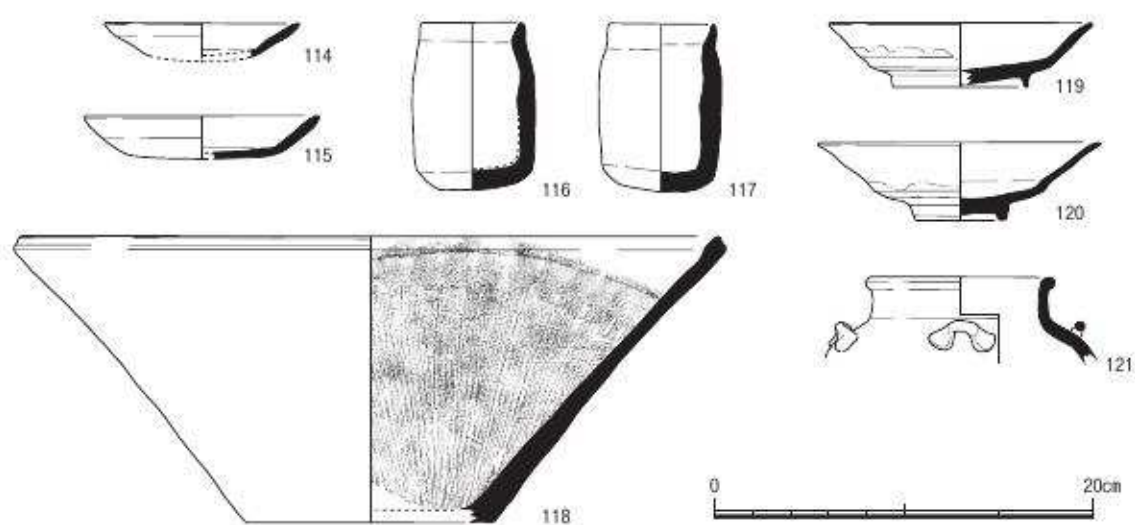


图23 土坑76出土土器实测图1 (1/4)

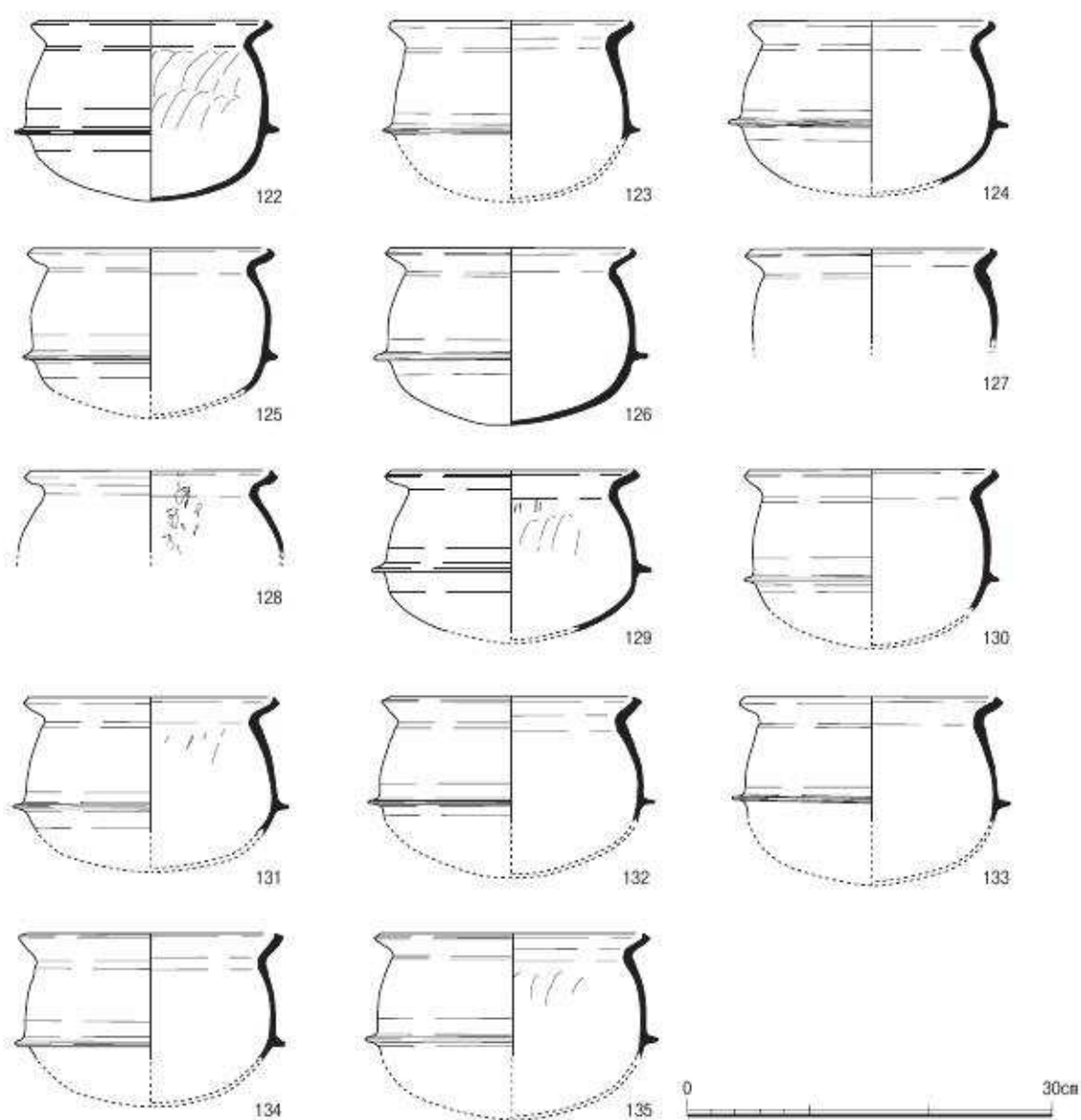


图24 土坑76出土土器实测图2 (1/6)

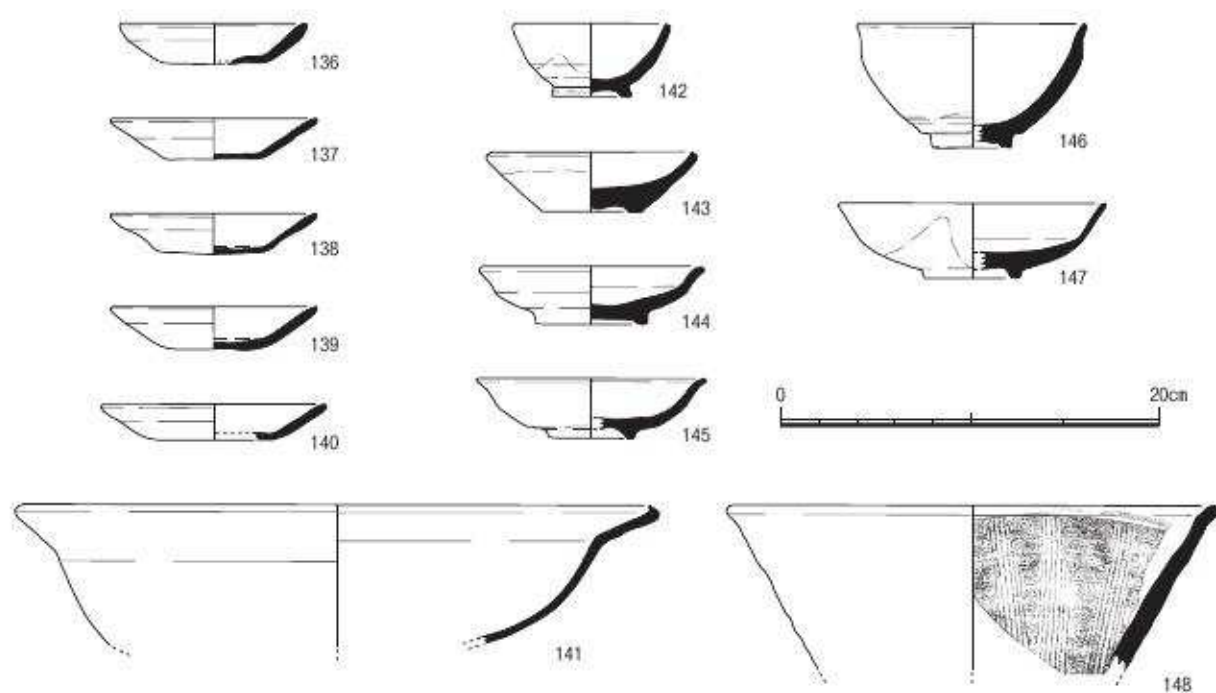


图25 土城28出土土器实测图 (1/4)

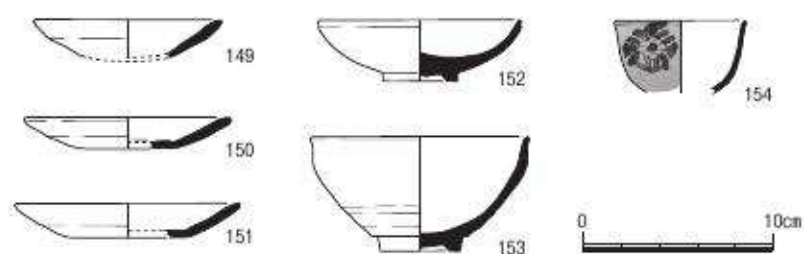


图26 土城32出土土器实测图 (1/4)

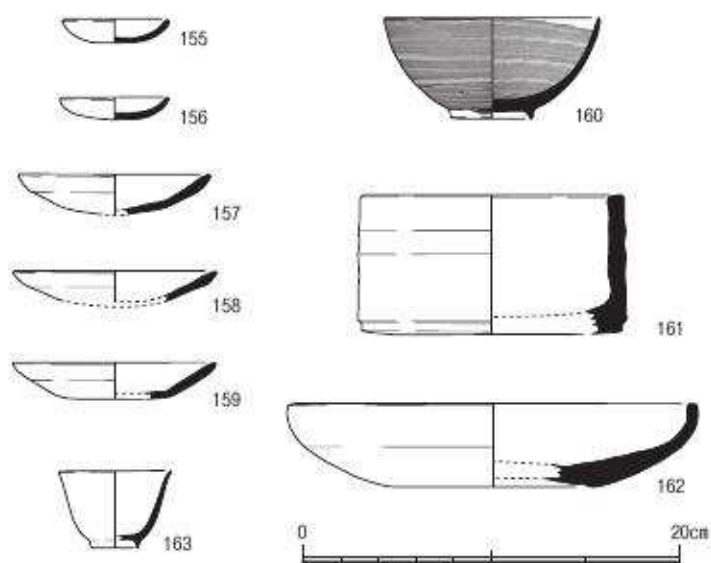


图27 石組56出土土器实测图 (1/4)

土壙32出土土器 (図26・図版10)

土師器皿S (149～151)、施釉陶器 (152、153)、染付碗 (154) がある。

皿Sは口径10～12cm、器高1.7～2cmを測る。149、150は口縁端部に、151は外面に煤が付着する。152は唐津皿で、口径10.8cm、器高3.3cmを測る。153は美濃瀬戸系の天目茶碗である。口径11.6cm、器高6.1cmを測る。胎土はやや粗く、5mmの小石を含む。

石組56出土土器 (図27・図版10)

土師器 (155～159)、施釉陶器碗 (160)、焼締陶器鉢 (161、162)、磁器碗 (163) がある。

土師器には皿Nr (155、156)、皿S (157～159) がある。皿Nrは口径5.7cmと5.8cm、器高1.3cmを測る。皿Sは口径10.2～10.8cm、器高2～2.2cmを測る。158は口縁端部内外面に煤が付着する。159は内外面に油煤が付着する。160は肥前系陶器の碗で、口径11.4cm、器高5.4cmを測る。161は口径14cm、器高7.4cmを測る。内面が煤けている。162は口径21.8cm、器高4.5cmを測る。胎土はやや粗く3mmの小石を含む。163は肥前系の白磁碗で、口径6cm、器高4cmを測る。

瓦 類 (図28・図版11)

三巴文軒丸瓦 (164)

井戸3石組内出土。右巻きの巴文である。尾部が互いに接しない。瓦当裏面と周縁部を平滑に仕上げる。胎土は6mm以下の砂粒を含み、精良。暗灰色を呈するが、焼きはやや甘い。

巴文軒丸瓦 (165)

井戸42出土。左巻きの2巴文である。尾部が長く互いに接する。珠文を密に配する。瓦当裏面は指ナデ、周縁部は平滑に仕上げる。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。

単弁八葉軒丸瓦 (166)

井戸42出土。単弁で弁の間に珠文を配する。瓦当上面から丸瓦部かけて縦方向の指ナデ痕が残る。丸瓦部裏面は縄目痕をナデ消す。焼成は良好で、灰色を呈する。

唐草文軒平瓦 (167、168)

井戸42出土。167は顎部凸面は横ケズリ、平瓦部凹面は布目痕が残る、瓦当裏面から平瓦部凸面はナデで仕上げる。胎土は精良で、灰色を呈する。折り曲げ技法。『木村捷三郎収集古瓦図録』掲載の栗栖野瓦窯出土瓦 (84) と同文である。168は瓦当部凹面と顎部凸面は横ケズリ、側面は縦ケズリ、平瓦部凹面は布目痕が残る。胎土はやや粗く、焼成は不良。灰白色を呈する。

唐草文金箔軒平瓦 (169)

土壙32出土。中心飾に蓮の横花文を配する。瓦当部凹面は縦ケズリ、顎部凸面から平瓦部凸面はナデを施す。瓦当凸面に金箔が確認できる。胎土は4mm以下の砂粒を含み精良。焼成は良好で、黒色を呈する。

唐草文軒平瓦 (170)

土壙76出土。瓦当部凹面と顎部凸面から平瓦部凸面はナデを、側面は縦ケズリ施す。平瓦部凹

面は布目痕が残る。胎土は微砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。二次焼成を受けている。

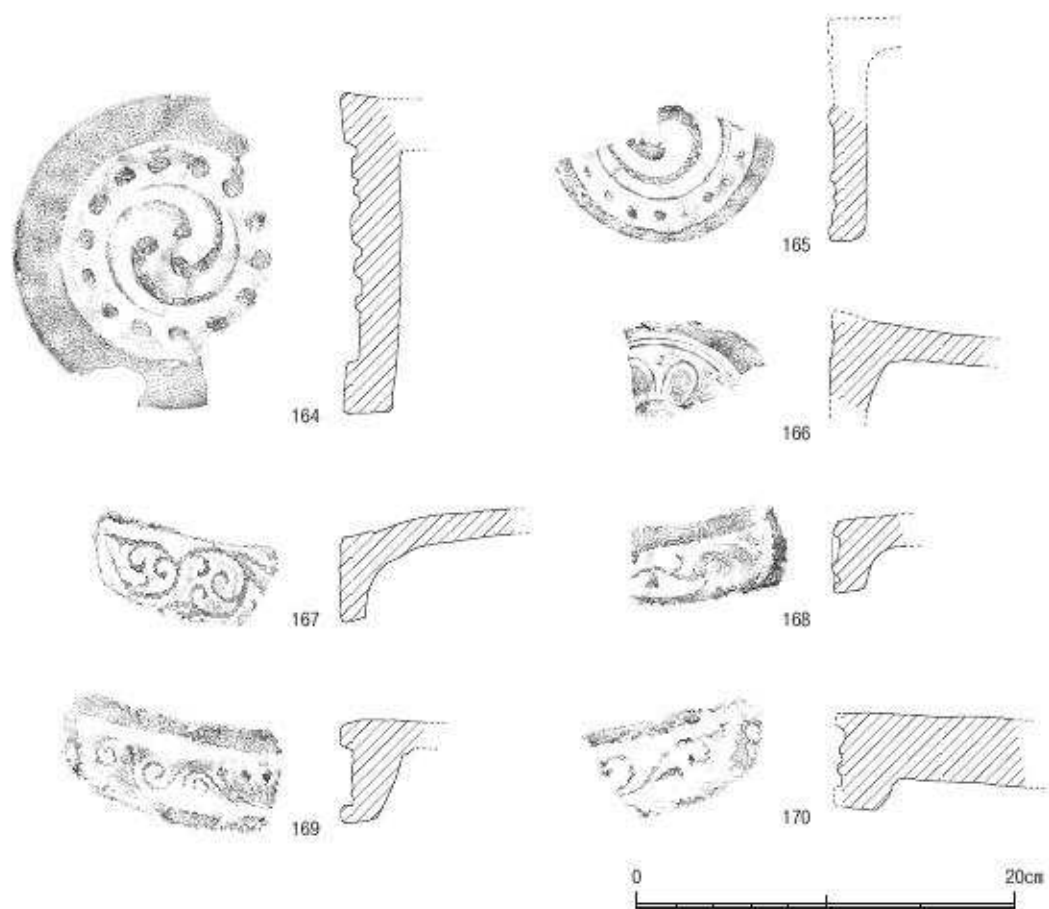


図28 軒瓦拓影・実測図 (1/4)

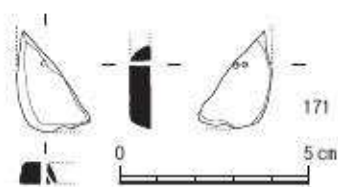


図29 石製品実測図 (1/2)

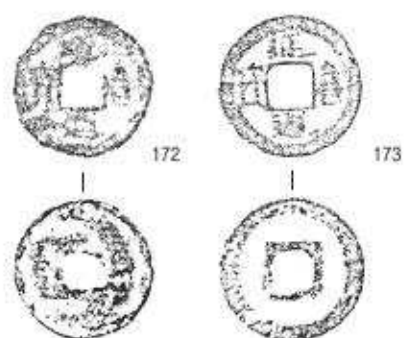


図30 錢貨拓影図 (1/1)

石製品 (図29・図版11)

石帯 (171)

井戸216出土。残存長2.7cm、厚さ0.55cmを測り、暗緑色を呈する。形状は山形(丸柄)か鈍尾と考えられる。潜り穴は横平行に配置する。

金属製品 (図30)

銭貨 (172、173)

土壙55下層から出土。皇朝十二文銭の一つである「延喜通寶」(初鑄907年)である。2枚とも表を外にした背合わせの状態出土する。

IV ま と め

今回の調査においては、平安時代から江戸時代にかけての井戸、掘立柱、土壙跡など多数の遺構を検出した。

平安時代の井戸216では、曲物内下層に土師器の小壺や灰釉陶器の碗を埋納し、その上に大きめの石を、さらにその上に土師器の皿を入れるという廃絶の様相を確認することができた。このような廃絶時の埋納は、遺構の文中でも述べたが、平安京右京二条三条十五町の調査の井戸142や平安京右京六条三坊二町の調査の井戸290でも確認している。また、平城京左京一条三坊十三坪の調査の井戸SE12も黒色土器の碗を埋納していると報告がある。これらの井戸はいずれも10世紀初頭から前半に廃絶している。埋納するものや、呪術的な要素の有無など差異はあるが、10世紀代の井戸廃絶に一定の祭祀の様式があったのではないかと考えることができる。

調査区北半部で検出した方形の土壙28、32、17、井戸5、1、土壙76は鍛冶関連の遺構と考え



図31 鍛冶師 (喜多院職人畫絵屏風)

られる。土壙17は大半が削平されているが南東角部を検出することができた。その形状から土壙28、32と同様の規模と考えられ、これらの土壙からは櫛の羽口や鉄滓といった鍛冶に関する出土遺物を確認した。また、鍛冶に必要な水を井戸5、1などから確保し、使用したと考えられる。土壙76からは、大和I型の羽釜がまとまって出土した。羽釜の内外面は煤けており、内部には鍛冶の際に使用した材料が炭化した状態で付着しているものや、朱が残存しているものもあった。鍛冶における羽釜の使用の様子を描いたものとして図31がある。三本脚の五徳に載せられた羽釜の中には何か煮えたぎったものが確認できる。錆付けや焼き入れなどのための液体と考え

られ、今回の調査で出土した羽釜に残存する付着物もこういったものと推察することができる。こうして鍛冶に使用した羽釜などを、板と杭を用いて箱状に整えた土壌の中に廃業時に埋納したと考える。

以上、今回の調査では井戸216の様相から、10世紀代における井戸廃絶時の祭祀を推察することができた。また、桃山から江戸時代前期にかけての鍛冶関連遺構とその出土遺物は、この時期の鍛冶を考える上で貴重な史料となった。これらの十一町の調査成果と共に、調査区北部の下層から、古墳時代に属すると考えられる土器を包含する土層を検出することができ、烏丸丸太町遺跡の一端を確認できた。

註1 『角川日本地名大辞典 26京都府』角川書店 1991年。

『日本歴史地名体系27 京都市の地名』平凡社 1979年。

『平安京提要』角川書店 1994年。

註2 『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年。

註3 拙稿『平安京右京二条三坊十五町－花園春日町の調査－』古代文化調査会 2016年。

註4 拙稿『平安京右京六条三坊二町・西院遺跡』古代文化調査会 2016年。

註5 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年。

註6 川口宏海「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ（付編 80年代の研究成果と今後の展望）、日本中世土器研究会 1990年12月。

中島和彦「南都出土の土師器甕・羽釜の検討」『立命館大学考古学論集』Ⅰ、立命館大学考古学論集刊行会 1997年12月。

註7 『木村捷三郎収集古瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年。

註8 『平成11年度 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』奈良市教育委員会。

註9 『喜多院職人畫絵屏風』東出版 1979年。

報告書抄録

| | |
|--------|-----------------------------------------|
| ふりがな | へいあんきょうさきょうにじょうしほうじゅういちちょう・からすままるたまちいせき |
| 書 名 | 平安京左京二条四坊十一町・烏丸丸太町遺跡 |
| 副 書 名 | |
| 巻 次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 水谷明子 |
| 編集機関 | 古代文化調査会 |
| 所 在 地 | 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404 |
| 発行年月日 | 2017年4月28日 |

| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | 市町村 コード | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|------------|----------|-------------------|--------------------|-------------------------------|------|-------------|
| へいあんきょう 平安京 さきょうにじょうしほう 左京二条四坊 じゅういちちょう 十一町・ からすままるたまち 烏丸丸太町 いせき 遺跡 | きょうとし 京都市 なかとろうく 中京区 たわらやちよう 俵屋町 | 26100 | 1 246 | 35度 00分 54秒 | 135度 45分 52秒 | 2016.11.01 ～ 2016.12.14 | 126㎡ | マンション 建設 |

| 所収遺跡名 | 種 別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|--------------------------------------|------------|-------------------|-----------|----------------------------------------------------------------|-------------------------|
| 平安京 左京二条四坊 十一町・ 烏丸丸太町 遺跡 | 都城跡 集落跡 | 平安時代 ～ 江戸時代 | 井戸、掘立柱、土塹 | 土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、灰釉 陶器、焼締陶器、国産 陶磁器、白磁、瓦類、 石製品、銭貨 | 平安時代の 井戸、鍛冶 関連の土塹 |

| | Aランク点 数 (箱数) | 内 訳 | Bランク (箱数) | Cランク (箱数) | 出土箱数 合計 |
|--------|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|--------------|--------------|------------|
| 点数及び箱数 | 173点 (8箱) | 土師器121点、須恵器6点、黒色土器1点、 緑釉陶器5点、灰釉陶器6点、焼締陶器 4点、国産陶磁器14点、白磁6点、軒瓦 7点、石製品1点、銭貨2点 | 69箱 | 0 | 77箱 |

版 图



1 調査地近景（北から）



2 第1面全景（北から）



1 第2面全景（北から）



2 第3面全景（北から）



1 第4面全景（北から）



2 井戸3（西から）



3 井戸5（北から）



4 土壙28（北東から）



5 土壙32（北から）



1 土壇76（北から）



2 土壇76断割（西から）



3 土壇76杭跡検出状況（北から）



4 土壇76断割（北から）



5 土壇76完掘状況（北から）



1 井戸42 (東から)



2 井戸42井戸枠検出状況 (西から)



3 井戸42断割 (西から)



4 調査区北東部柱穴群 (北西から)



5 土塙120 (西から)



1 井戸216 (東から)



2 井戸216円形井戸枠内検出状況 (西から)



3 井戸216円形井戸枠内下層検出状況 (西から)



4 井戸216断割 (西から)



5 土坑170 (北から)



3



55



7



56



18



58



64



34



69



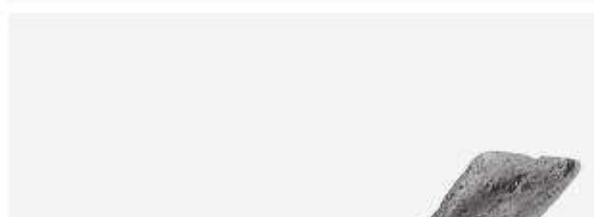
42



70



47



82



54

土壙170 (3・7)・井戸216 (18)・土壙120 (34)・井戸42 (42・47・54~56・58・64・69・70・82)
出土遺物



83



105



84



109



87



112



113



88



116



89



100



117



103

井戸42 (83・84・87～89)・土壙80 (100・103・105・109・112・113)・土壙76 (116・117) 出土遺物



122



129



124



130



126



131



128



133

土壙76 (122・124・126・128～131・133) 出土遺物



134



147



142



152



143



153

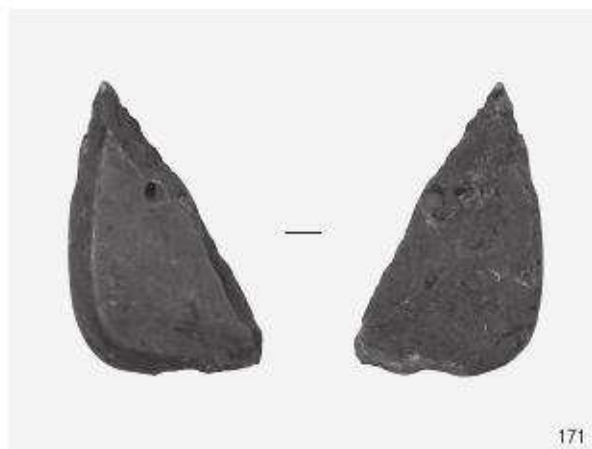
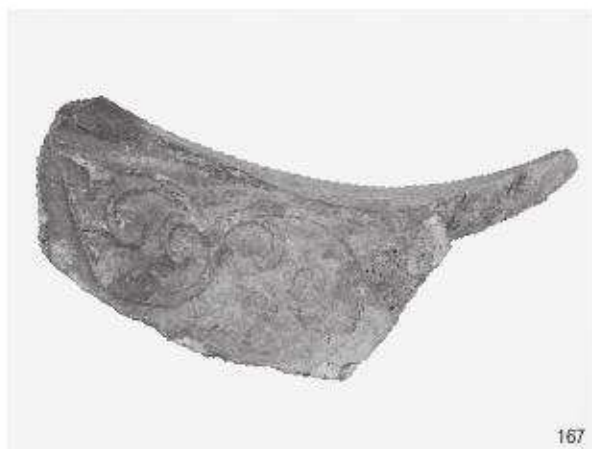


144



161

土壙76 (134)・土壙28 (142~144・147)・土壙32 (152・153)・石組56 (161) 出土遺物



井戸3 (164)・井戸42 (165~168)・土壇32 (169)・土壇76 (170)・井戸216 (171) 出土遺物

平安京左京二条四坊十一町・烏丸丸太町遺跡

発行日 2017年4月28日

編集行 古代文化調査会

住所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
TEL (078)857-6368

印刷 真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034

